
のび太がバイオハザード

塩酸爆発フライドポテト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

のび太がバイオハザード

【Nコード】

N5654Q

【作者名】

塩酸爆発フライドポテト

【あらすじ】

『ドラえもののび太のバイオハザード』を元に書いてみました。

劇場版では色々戦ったりしながらも平和であったのび太達の世界。そこに突如襲い掛かる脅威。俺の趣向でギャグを入れて台無し。のび太と仲間達に未来はあるのか、この事件の裏に何が？

回想から始まる物語は回想する人物の生存を表す訳だがそこに不思議な魅力とい
のび太君のイメージ的に敬語あんま使わない気がしたので
読者の方々へ話しているシーンもタメ口にさせていただきました。
申し訳御座いません。

回想から始まる物語は回想する人物の生存を表す訳だがそこに不思議な魅力とい

「・・・やあ、こんな小説を見てくれる人がいたのか。」

いきなりあなたの見ているこのページで話し出すこの男、
その正体は、言わずと知れた『野比のび太』君である。

「頭の悪い僕だけど、あの事件だけは忘れられないよ・・・。

この作品のタイトルを見てきたのだろっからどんな事件だったのか
予想はつくだろう。

全て覚えているつもりさ、うん。だが生憎僕は記憶力が無くてね、
もし忘れた所があれば一部、面白可笑しく脚色させてもらっかもしれないね。」

——おいおい、それでは困るよ？のび太君。

「いや、覚えていたって、脚色でもしなきゃ最後まで話す自信がないよ。

それだけあれは恐ろしい事件だったんだ・・・。とは言っても、
まあ、折角来てくれてるのにふざけて話すのも失礼だからね。

…忘れたくても忘れられない事件だ、きつと覚えているさ。真面目
に話すことを誓うよ。」

——うん、そうして貰えると助かる。

というわけで、この話の中で僕たちがした馬鹿なこと、笑えること、
ありえない物、それらは全てあの日の真実だ。ギャグメインとも言
えるかもね。

それでもあの事件は恐ろしかったんだ。それだけは分かってほしい

ね。」

——まあ、ギャグに仕立て上げてしまったのは俺だね。

まだ先を書いてない以上、仕立て上げたと言っるのはおかしいが。

「僕の記憶を話す割に僕がいないところまで語られることもあるかもしれない、

そのときはご都合主義というやつだと思ってほしい。」

——全て俺のせいに相違無いな。

「——長々と失礼したね。では、話そう。」

回想から始まる物語は回想する人物の生存を表す訳だがそこに不思議な魅力とい
か。

自分でも拙くてゴテゴテに見えるのですが、いかがだったでしょう
次回からは前書きも後書きももうちよつとふざけていく気がしてな
りません。

『日常終了のお知らせ』 幸せ終了。世の中いいことばかりじゃないってか。 幸せ
ギャグ要素が無いですね、はい。
自分でもびっくらするぐらい残虐表現が。

そしてタイトル100文字以内ってのがどうにも短く感じられる。

『日常終了のお知らせ』 幸せ終了。世の中いいことばかりじゃないってか。幸

リアルじゃ冬真っ盛りだというに、この時のび太達はバカンス帰りだった。

夏休みが始まってすぐ、『ドラえもん』と『のび太』『ジャイアン』『スネ夫』『しずか』

そして原作のびハザにはいなかった『出木杉』『安雄』に『はる夫』、
あろうことが『先生』も一緒だった。

南の島でのバカンスは素晴らしい物だった。皆はこの時間が永遠に続くことさえ願った。

しかし、勿論そんなことは無く、一同は日常のあるはずだった場所へ帰ってきた。

——今思えば、その後の悪夢はこの幸せの埋め合わせだったのだろうか？

ごく普通の部屋——（24畳？何のことかなあ？）に突然ピンク色のドアが現れる。

そしてそのドアが開き、その先に繋がっていた遠く離れた島から9人も人影が出て来た。

「あー、楽しかったー！」

そう言うのはこの部屋の主、野比のび太。

「家に帰ったらまた店番かぁー・・・」

これは近所のカキ大将、ジャイアンこと剛田武。

「やっとママに会えるよ！バカンスも楽しかったけどね。」
こちらはここで一番の金持ち、骨川スネ夫。

「3日も家族の顔を見てないですものね。私も家に帰るのが楽しみだわ。」

このメンバーの中では唯一の女の子、源しずか。のび太も彼女にデレデレである。

「本当にドラえもん君のポケットは不思議だね。」
秀才、出木杉英才。妬ましい。

「青狸、お前すげえなあ。」「また泳ぎたいなあ。」
安雄とはる夫。俺からは「誰だよ・・・」としか言いようが無い。

「狸じゃないって・・・。」
少しムツとした様子で話すのは未来のネコ型ロボット、ドラえもん。そう、猫なんだよ、耳はないけど。狸じゃないんだよ、耳はないけど。

「いやはや、不思議なことがあるもんだなあ。」
まだドラえもんの秘密道具に驚いている先生。中年は適応力が無いなあ。

「なんか今物凄く馬鹿にされた気がするが・・・まあいい。」
皆、寄り道しないで真っ直ぐ家に帰るんだぞ。私は野比のママに挨拶をしてこよう。」

はい、という返事を背に階段を下りていく先生。

「楽しかったよ、ありがとう、ドラえもん。」

のび太がそう言い出し、皆からも口々にお礼の言葉。

「いやぁ・・・／＼／」

ドラえもんも満更でもない様子。

「じゃあ皆、バイバ・・・」

バイバイ、そののび太が言いかけた。その時だった。

——皆がよく知る中年男の悲鳴が聞こえたのは。

「・・・先生!？」

突然の声に驚くのとび太、他の皆も不安気な様子。

「僕が様子を見てくる。」

そして、出木杉が部屋を出て、階段を下りていく。

刹那、背後のガラスが割れた。

「痛えっ!」「うわぁ!」

ジャイアンとスネ夫が同時に悲鳴を上げた。

スネ夫はガラスの破片で怪我をしただけだった、しかし、ジャイアンは・・・。

窓を割った張本人、いや、人ではない、鳥に襲われていた。

「何だこの鳥!？」

ジャイアンが鳥を殴りつける。しかし鳥も激しくジャイアンに攻撃をする。

そして1階からまたしても叫び声、今度は出木杉だ。

のび太たちに向かって話しているようだ。

「のび太君、君のお母さんが・・・!!」

それを聞いたのび太、

「・・・ママがどうしたんだ!？」

居ても立ってもいられなくなり、階段を駆け下りる。

最後の段で転んで尻餅をついてしまった。

「・・・痛ッ・・・！いや、それより、ママは・・・。」

そう言いながらも尻の痛みに立てず、台所に向かって這っていくのび太。

ふと床に自分以外の影が差す。

「・・・ママ？一体、どうし・・・！！」

顔を上げたのび太の声は、そこでストップした。

目の前にはいたのは間違いなくのび太のママ、たま子だった。しかし、その姿は変わり果てていた。

死んでいるというわけでは無く、立って声を上げている。

しかし皮膚は間違いなく死人のそれであり、声もうめき声でしかなかった。

いうなれば、動く死体。その死体は、自分の息子に襲い掛かった。

「ウウウウウ・・・」

「ママ！？僕だよ、のび太だよ！・・・ママ！？」

「のび太君、危ない！」

後ろからたま子にタツクルをかます出木杉。

その向こうには、肩に傷を負った先生が見えた。

「のび太君！」

2階から下りてきたドラえもん、に襲い掛かるたま子ママ。

「うわぁ！？」

「ドラえもん君、倒してくれ！」

ドラえもんにも迷いはあっただろう、だが冷静な判断を下し、空気を砲を取り出し、撃った。

「ウウウウアアア！！」

叫んでノックバックしながらもドラえもんに突っ込むママ。

「一体・・・どうしたと言っただ！？」

いいながら連射をするドラえもん。ノックバックするたま子。そのたま子を、台所の包丁を持った出木杉が背後から切り裂く。

たま子の首が半分切れ、倒れる。完全に死滅したようだ。
だが、出木杉は、倒れているたま子の首を完全に切断した。
「こうでもしないと安心できないっ……!!」

その光景を目の前で見っていたのび太は、軽く放心状態になっていた、
だが、

「そうだ、先生！」

怪我を負っていた先生を思い出し台所のほうへいく。

「来ちゃ駄目だ、野比!!」

という先生の言葉が響くと同時にのび太は台所に入り、その言葉の理由を知った。

台所には、のび太の父親であるのび助の死体があった。血まみれで倒れている。

しかも首を切断されており、食い散らかされたらしい頭から脳味噌がはみ出ていた。

「……ッ!う、うわあああああああ!!」

大人でも見たら発狂しそうな光景をのび太が見たのである。しかもその死体は自分の父親。

吐き気に襲われたのび太は南の島で食べたご馳走を吐き出し、気絶した。

『日常終了のお知らせ』 幸せ終了。世の中いいことばかりじゃないってか。 幸

こんな話にしてこの後どうギャグ書くつもりだよ、俺馬鹿じゃねーの？

まあ、どうにかなると信じましょう。

『出発』出発で思い出したが「旅立ちの日に」って卒業式でよく歌われる気が

やはりサブタイトル100文字じゃなあ。

言葉の節々を削らなくちゃいけないから口調的な物が予定と狂う。
削ってどうにかここまでの3話全てちょうど100文字ですよ。

2011.2/2

一部の日本語を修正、タイトル画面の言葉不足も補足。

『出発』出発で思い出したが「旅立ちの日に」って卒業式でよく歌われる気が――

――黒。静。

何も見えない、聞こえない。意識はあるが体は起きてないのか。後ろから音が聞こえた。足音。呻き声。

振り向こうと体を動かす。黒い、体の感覚がない、動いているのすら分らない。

むわつとした吐き気がする、目の前が黒以外の色にぼやけてきた。灰色がかった肌色。赤も交じる。

一瞬、ハッキリとピントが合い、目の前の物を見て再び気絶しかけて、外の光に目が覚めた。

「・・・さん・・・。の・・・さん!・・・」

何と言っているのか、よく分からない、女の子の声・・・聞き慣れた・・・

「のび太さん!!」

まだボーッとしているのび太はやつと声の主を確認する。しずかだった。

「あ・・・しずかちゃん・・・僕は・・・。ママは・・・。パパは・・・。」

そこまで言っただけ思い出した。全てを。

目が覚める直前に一瞬見た物は、変わり果てたママ。その右手にはパパの生首。

再び吐き気を催したのび太だが、女の子の前で吐くのも気が引け、必死に堪えた。

「大丈夫?」

「う、うん・・・。」

どうやら2階ののび太の部屋に運ばれたらしい。机の上には窓を破

った烏の骸。

「そうだ、スネ夫は、ジャイアンは・・・先生は？」

怪我人がいたことを思い出し、その身を案ずる。

あたりを見回すと、包帯を巻かれた怪我人3人がいた。無事なようだ。

出木杉とドラえもんは何か話しており、

安雄とはる夫は指示を受けたのか荷物の整理をしていた。

「僕は・・・どのぐらい気絶してたの？」

「3時間つてところかしら。気絶したって無理もないわ、

”あんなこと”があつたんだし・・・。」

何もかも夢だったらしい、そう思っていたのび太だが、その言葉で現実を思い知らされた。

ふと窓から外を見やると、地獄としか言いようのない光景が広がっていた。

たま子のようなゾンビも数多くいる、火事になってる家もある。

死体もあり、その死体をゾンビが食っていた。

再び吐き気を催したのび太は、しずかちゃんに断ってもう少し横になっっておくことにした。

約1時間後、のび太も多少落ち着き、全員で今後のことを話すことにした。

「僕とドラえもん君で話してみただけど、学校に行くのが一番だと思うんだ。」

と、出木杉が話し出した。

「ひとまず安全そうな大きな建物だし近い。

災害時の避難場所にもなってるから、他にも誰か来てるかもしれない

い。」

「こんな状況で外に出るの？」

と、明らかに怯えた様子のスネ夫が口を出す。

「学校ならゾンビがいても広いから逃げ回れるけど、この家じゃそうもいかないよ。」

ゾンビが複数体入ってきたらお終いだ。」

と、ドラえもんが諭す。

「安雄君とはる夫君に荷物の整理を任せておいたけど・・・どう？」と出木杉が聞くと、安雄が武器の説明をし出す。

「まず台所の包丁が4本、野球用のバットとボール、

外の木の枝に烏が割った窓ガラスの大きな破片をテープで巻いて作った簡易な刃物5本、

それと、表の警官を調べたら、これが・・・。」

そう言って安雄が恐る恐る出したのは、ハンドガンだった。

これには全員が息を呑む。

「近くに弾が落ちてるのも見つけた。銃にも最初から全弾入ってたから、計12発だ。」

「分かった、はる夫君は？」

はる夫も収穫物を取り出す。

「この家の庭に植えてあった植物は、傷薬に使えるらしい。それが3回分。」

救急箱に入っていたスプレーが1本と、止血薬が5回分。

それと食料、冷蔵庫に入ってたので一週間ぐらい持ちそうだが、外に出して持ち運んでもしばらく経てば腐ってしまう・・・。」

「袋に入れて、氷水に漬けて運ぼう。」

外の探索は後回しで、まずは学校にいかないと・・・持ち物の分配はどうする？」

出木杉が言った。

するとジャイアン。

「まずは武器から分けよう、刃物類がちょうど合計9本だからまず1本ずつ。

ハンドガン・・・は。」

「僕にくないか？」

そう言ったのはのび太だった。

「そうだな、のび太が一番射撃が上手いし、のび太が使ってくれ。」
安雄がハンドガンをのび太に手渡す。

これで人の形をした相手を撃つのかと思うと、冷や汗が流れる。

「治療用の道具は私が持つわ。戦いじゃあまり役に立てそうにないし。」

と言ったのはしずか。

「分かった。」

回復アイテムを詰めた箱がはる夫からしずかに手渡される。

「じゃあ、学校に・・・。」

と言う出木杉の言葉をのび太が遮った。

「・・・もしもボックス。そうだよ、もしもボックスがあるじゃないか！」

あれを使えばなかったことに・・・あれ？どうしたの？皆。」

その言葉を聞いて皆俯き加減になる。

「ごめん、のび太君、さっき外の様子を見たとき、ゾンビに襲われて・・・

ポケットが壊れちゃったんだ。」

素晴らしいアイデアだ、これで救われると思っていただけに、のび太の心はどん底に突き落とされた。

「・・・そう。」

ショックの余り、そう返事をするのがやっとだった。

そして一同は野比家を出た。

絶望と疑問、死への恐怖を胸に。

『出発』出発で思い出したが「旅立ちの日に」って卒業式でよく歌われる気が――

あれ？ギャグ？もう知らんな。

じゃあこのあとがきでギャグやりましょう。ここでキャラと座談会。
第1回のお相手はのび太君、やはり主役だし。

――やあ、のび太君。

「うん。」

――えーっと、話すことないけど……。うん、一人じゃ足りん。
追加、ジャイアン。

「えっ」

「えってなんだよ、えって。」

――まあ、うん、そうだなあ。とりあえずここまでの流れに何か？

「そうだな、とりあえずサブタイトルどうなってるんだよ。」

――え？

「いくらなんでも長いだろう。100文字ありや充分だろ普通。」

――そうは言ってもねえ、普通に書いてもなんかあれじゃん？

「いやだからって……。」

――ほんと思うがままに書いてると普通に

100文字オーバーするからねえ。

今回なんか150文字近かったかな。

「もうママやパパは出ないのかな。出ないなら別にいいけど。」

――えっ。

「ドライだなお前……。」

「うーん、小説の中で無駄に悲しがらされちゃったからねえ、正直

『恐怖』こういうので人物の尋常じゃ無い恐怖や喜びといった感情を書くのも結構
今回書きたいだけ書いたときのサブタイトル文字数をカウントした
ら140文字でした。どうしても削ると所々口調がぶっきらぼうに
なる。

そして後から見たら仕切りの枠だけじゃ区別しにくいので、
本編と後書きの間に5行ぐらいあけることにしました。
前回までのも修正しておきました。

『恐怖』こういっので人物の尋常じゃ無い恐怖や喜びといった感情を書くのも話

野比家を出た一行。

そこには地獄が広がっていた。たくさんのゾンビ、死体、燃える家、皆、自然と無言になり、前に進む気を無くす。そんな中、

「・・・行くぞ。」

とジャイアンが言い、先導して歩いていく。皆もそれに従った。

ゾンビとの戦闘は避け、とにかく先に進んでいく。ゾンビは動きにも鈍り、

知能も低下しているようで、避けるのは容易だった。

進んでいくうちに、コンビニの駐車場の前に出た。

「あの建物を通るのが近道だね。」

と、コンビニの横の小さな建物を指差して出木杉が言う。

「コンビニには何か役に立つ物があるかもしれないぞ。」

とジャイアンが言ったが、

「探索は後回しにして、ひとまず学校で準備を整えよう。」

何人かずつでチームを組んで場所ごとに探索していけばいいさ。」

と言う出木杉の意見に従うことにした。

「でも、この人数であの狭い駐車場にあれだけゾンビがいるんじゃ、抜けられないよ。」

とスネ夫。

「・・・そうだね、倒すしかないか。」

出木杉の言葉を聞き、治療道具に手いっぱいいなしずかと、傷の深い先生以外は刃物を取り出す。

そして、戦闘が始まった。

ゾンビの数は6匹。

まずは足の速い出木杉が手前の一匹に近づき、右肩から股のところで切り裂く。

「ギウガアアアアア！」

ゾンビに相当なダメージを与えたようだが、致命傷にはならなかったようで、

出木杉に反撃を仕掛ける。

しかし出木杉は冷静に、包丁を突き出した。

ゾンビが大人の体だったので身長差的に初撃では狙えなかったある場所が、

攻撃のために腰をかがめたことで狙えるようになった。

そこは顔。

額に刺さった包丁が後頭部から血と共に飛び出し、

出木杉が包丁を引き抜くとゾンビは倒れ、動かなくなった。

豪腕のジャイアンが野球用の金属バットを思い切り縦に振るう。

一撃でゾンビの頭が潰れ、こちらも動かなくなる。

安雄とはる夫は二人がかりでゾンビ一人を切り殺した。

これで残るは3体。

ビビりながら戦うスネ夫がどうにかゾンビの体を切り裂く。しかし、

「うううがああああ！！！」

ゾンビの叫び声に腰が抜けて武器を落としてしまった。

横からドラえもんがゾンビを殴り飛ばす。

ゾンビが怯んだ隙にドラえもんはゾンビの頭に包丁を突き刺し、止めを刺した。

そんな戦闘が繰り広げられている間に、出木杉は更に1匹倒していた。これで残るは女性のゾンビが1匹のみ。そいつはのび太に襲い掛かった。

のび太も刃物を構えて、落ち着いてゾンビの攻撃を避けた、後は切り裂けばいい、のだが、

眼鏡をかけた女性ゾンビを見て、たま子ゾンビのことを思い出した。そして目の前の化け物が人間だったことを思い出す。

「人を・・・殺す？」

頭が真っ白になった。動けない。

体勢を立て直したゾンビが再びのび太に襲い掛かっても、何もできなかった。

「あぶねえ！」

横からジャイアンがバットでそのゾンビを殴る。

ゾンビは倒れこそしたがまだ息があった。そこにジャイアンは追撃を加え、脳天を潰した。

「馬鹿野郎、何やってんだ！」

ジャイアンがのび太に向けて怒鳴るが、

「ママ・・・。」

というのび太の言葉を聞くと何も言えなくなった。

「・・・敵は全滅した。行くぞ。」

「・・・うん。」

建物の中にいたゾンビ2匹も殺害し、外に出る。数十メートル先に学校が見える。

「もうすぐだ、頑張ろう」

と出木杉が激励し、一向は再び歩き出す。

「なんか・・・犬の鳴き声が聞こえない？」

進み出したところでスネ夫が言った。

「そうね、しかも学校のほうから・・・。」

と、しずかも同意する。

「ただの野犬だよ、きつと。」

と、出木杉は言ったが、実際には違った。

校庭に入った時点で2匹の犬が見えた。その犬は黒っぽい中型犬で、向かい合って食事をしていた。

これだけ言えば微笑ましい光景なのだが、食べてるものが問題だった。

今更言うまでもないかもしれないが、それは人間の死体だった。

こちらのほうを見た犬が襲い掛かってくる。

ゾンビと違って動きが素早い。

「面倒だ、走って校内に入るぞ！」

とジャイアンが言い、駆け出す。先生はしずかと出木杉に支えられて走った。

しかし、のび太だけは動けなかった。

先程の戦闘の時から、死体やゾンビを見ただけで足がすくんでしまっていた。

数メートル先を走っていたドラえもんが後ろを振り向き、戻ってきた。

「のび太君、はやく！」

ドラえもんは手を引かれて、半ば放心状態のまま走り出す。

そして無事に全員が校内に入ることができた。

今のび太の中を支配している感情は、恐怖だった。

『恐怖』こういつので人物の尋常じゃ無い恐怖や喜びといった感情を書くのも話

はい、今回も座談会。今回のお相手は、スネ夫と先生。

「なんで僕が先生となのさ？」

「あー、いや、他の人たちの組み合わせは

しっくりくるように作れてさ、余った2人は適当にくつつけておこうかなって。」

「ワシは余ったのか……。まあ、早速なんだが。」

「はい？」

「前々回あたりで、ワシの事中年って言ったよな？言ったよな？それも2回ぐらい。」

「っん。言ったけど。事実だもの。しょうがないね。」

「……。さて、このガラスなナイフで……」

「っ■」 スタンガン

「アッー！！」

「先生！？先生！！しっかり！！」

「……。あーあ、気絶しちゃったよ……。」

「さすが20万V、効き目が違うね。」

「じゃあここからはスネ夫君ソロで。」

「えー……。」

「じゃあ、何か質問やご意見は？」

「そうだなあ、更新頻度は？」

「えーっと、昨日はたまたま学校休みだったし登録日だったから

一気に3話もやったけど、今後は1日1話ってとこかな。

体調崩して学校休んだときは親フラにつき

PCできないので不可能。

「なるほどね。書きながら内容考えるみたいだけど、1話作るのに何分ぐらいなんだい？」

—— まともな質問ばかりでおじさん嬉しいよ。

本編を書き終えるまでに30分かかるかかからないかな。

それからタイトルを2分ぐらいで思うがままに入力、

100文字に収めるのに10分以上かかるかな。

今回は5分ぐらいだったけど。

そして前書きが1分から2分、

今書いてる後書きがねえ、前回からこういうシステムに

しちやったもんで時間かかってるんだ、

今5分か10分ぐらい。

「なるほどね、まあ僕からはこのぐらいかな。」

—— そうかい。

「そうだよ。」

—— じゃあ、今回はここまでかな。

えーっと、スネ夫君、最後に何かご挨拶とか？

「そうだなあ、じゃあ読者の皆さん、このゲーム見てよ！

まだ発売前のやつなんだけどね、大迫力のFPSなんだ！

え？やりたい？悪いね、これは一人プレイなんだ。

それにハードも未発売だからうちに来ないとねえ、

残念だねえ、うつひっh(ry」

—— ■〃 安定のスタンガン

「イ”エ”ア”アアアアアアア！！！」

—— ふむ、60万Vはやり過ぎたか？

それでは皆さん、ご機嫌よう。

『覚悟と希望』俺が抱く些細な希望の殆どは、大抵駄目になる。まあ大体俺の自

先生の名前を調べた際に、出木杉じゃなく出来杉だったことが分かったので（前は出来杉だと思ってて出木杉だったことを知った記憶があつたのだがなあ・・・。）今回から修正。
これ投稿した後で今までのも修正しておきます。

2011.2/7

やっぱあいつ出来杉じゃなくて出木杉やんけw
ってことで再修正しておきます。

もう平仮名でいいよあいつ・・・ってわけにもいきませんよね。

『覚悟と希望』俺が抱く些細な希望の殆どは、大抵駄目になる。まあ大体俺の自

ドラえもんが玄関にしっかりと鍵をかけ、一同は近くにあった保健室に入った。

そこにはゾンビはおらず、生存者達がいた。

「おおっ？まだ生存者がいたのか。」

多少驚いた様子で最初に声を発したのは、中学生か高校生ぐらいの色黒の男だった。

「あら、あなた達はこの学校の・・・。」

そう言ったのはこの学校の6年生であり、テニスクラス部長の緑川聖奈だった。

「坂本先生に、君達は確か・・・5年生だったかしら？」

「ああ、私がこの子達の担任だよ。君は緑川君だったね。」

「俺は翁蛾健治だ。」

「ぼくは1年生の山田太郎。」

無邪気な男の子が言う。

「町内会長の金田だ。」

中年その2が言った。

「誰が中年だって？」

のび太達も挨拶を交わす。のび太が挨拶をした時は金田以外の3人が反応を示した。

「あら、あなたがあの野比君？」

「え？知ってるんですか？」

「ええ・・・まあ。」

「ぼくもきいたことあるよ、すごくだめな人だって。」

「・・・。」

「俺の後輩にこの学校の出身がいてな、そいつもお前のことを駄目

な奴だったってよ。」

「・・・そうですか。」

「全校でその名前を知らない人はいないってぐらいに有名人よ。悪い意味でだけど・・・。」

「・・・も、もういいです。」

「さて、これからどうするよ?」

健治が切り出す。

「まずは校内から探索してみよう。」
と、出来杉。

「俺はやはりあのコンビニが気になるんだが・・・。」
とジャイアンが言ったのには、ドラえもんも同意した。

「そうだね、何かあるかも。」

「・・・あれ、そういえば、皆、あれ忘れてない?」

「えっ?」

何かを思い出したらしいスネ夫に、しずかが聞く。

「・・・ほら、のび太の家の食糧・・・。」

「・・・あつ。」

出来杉でさえも忘れていたという信じがたい事実。

この状況では生き延びるための食糧の確保が重要になると思われる。

「お前ら・・・バカか?」

呆れた様子で健治が言う。

「・・・とりあえず、校内の探索、コンビニの探索、皆の家を回りながらの探索、
の4つのグループに人数分けしよう。」

と出来杉が言う。そこに、

「私は絶対にいかんぞ! 付き合ってられん!」
と、金田が言い出す。

「私は目の前で娘と妻が殺されたんだぞ! やってられるか!」

とダダをこねた。

「何言っただあんだ！家族が死んだのはあんただけじゃないんだぞ！！」

それこそび太なんて……。あ……。すまない。」

言っただ後後悔した様子のジャイアンがのび太に謝る。

「……。ううん。」

俯き加減でのび太が返事をする。

まだあの時の光景は忘れられない。その恐怖が尾を引いてゾンビと戦えない自分も、

金田と同じなのではないかという自己嫌悪に駆られる。

「……。ぼくのパパとママもなんだ。」

太郎も呟く。自分だけじゃなかったのか、とのび太は多少驚く。しかも自分より小さな子がだ。

「……。すまん、ワシも探索するにはきつそうだ……。」

先生が言い出す。怪我をしているのだから無理はできないだろう。

「残り11人をどう分けるかか……。」

出来杉が考え出したところで、

「……。その前に、僕、トイレ……。」

と太郎が言い出す。

「こ、このタイミングでかよ！？」

健治が再び呆れる。

「1人じゃ危ないわ。誰かが……。」

と聖奈が言っただところで、

「僕が行くよ。」

とのび太が返した。何ができるわけでもないが、放っておける性質ではなかった。

「のび太だけじゃな。俺も行くぜ。」

と言っただのはジャイアン。

「じゃあ2人ともよろしく。僕はその間探索のメンバーを考えておくよ。」

と出来杉が言い、太郎とのび太、ジャイアンは教室を出た。

そして1階男子トイレ。

「じゃ、はやく用を足しちゃって。」

というのび太の言葉に太郎はうなずき・・・個室に入った。

「おま、大かよー!!」

ジャイアンがあからさまに驚く。

「うー・・・ん。」

そして気張りだす太郎。

「まさかそつちとはね・・・。」

などとのび太が言い出したところで、ドアが開く気配。

「・・・ん？誰だろう？」

のび太とジャイアンが見に行った先には、3体のゾンビがいた。

「・・・!!太郎、もう少し出してろ!!」

「・・・えっ。」

多少無茶苦茶なことを言い臨戦態勢に入るジャイアン。

しかしのび太はまだ恐怖があり、動けない。

「まだビビってんのかよー!!じゃあ、お前は太郎を見てろ!!」

言いながらジャイアンがゾンビに突っ込んでいく。まずは一撃。

その一撃はゾンビの頭を壁に打ちつけ、早速1体を倒した。

残る2体が同時にジャイアンに襲い掛かる。

これにはたまらず、ジャイアンも後退する。

その2体はジャイアンの横を通りのび太のほうに向かっていく。

「させるか!!」

とバットを振るジャイアン。しかしゾンビはジャイアンの脇腹に爪を立てた。

「・・・ぐっ!!」

傷は浅かったものの、怯んでしまった。

なおもそのゾンビはジャイアンに襲い掛かり、もう1匹はまっすぐのび太達の方へ。

「しまった!!」

ゾンビに押さえつけられたジャイアンは振りほどくの到手に届かない。

のび太に加勢する暇はない。

「う・・・うわ・・・。」

ゾンビが向かってくる。自分も戦えばいいことだ。

だが、しかし、それができなかった。

のび太の中に巢食う恐怖は並大抵なものではなかったのだ。

もうお終いだ。自分は死ぬ。やはり自分は噂に違わぬ駄目な奴だったのだ。

そう思い、目を閉じる。もう助からない。恐らく太郎も殺されるだろう。

・・・太郎？

「・・・野比兄ちゃん？」

個室の中から太郎が声をかけてくる。そうだ、ここで何もしなければ自分が死ぬだけじゃ済まない。小さな太郎まで死ぬことになるのだ。自分と同じ、家族を失った太郎。

そのとき、

「いつまでボサツとしてるつもりだ、馬鹿野郎!!」

その言葉と共に、ジャイアンが自分に襲い掛かっていたゾンビを吹き飛ばした。

そこからジャイアンがこちらのゾンビに攻撃しても間に合わないだろう。

やれるのはのび太しかいなかった。

「・・・死なない。死なせない。」

そう呟き、のび太はハンドガンを構える。

もう誰かが死ぬのは御免だった。それで誰かが悲しむのも御免だった。

「もう大事な物を失うのはたくさんだ！仲間は、僕が死なせない！」

覚悟の一弾を放つ。

その弾丸はゾンビの頭に命中し、見事に吹っ飛ばした。
ゾンビの体が崩れ落ちる。

「・・・や・・・やった。」

恐怖心を払いのけ、戦うことが出来た。
生きるため、守るために。

「・・・ナイスだぜ、のび太。」

「・・・へへ。」

パン・・・と、歩み寄ってきたジャイアンとハイタッチをする。

「もう出てきてもいいよ、太郎。」

そう声をかけるが、太郎は出てこない。

「・・・太郎？」

まさか何かあったのか、という不安に襲われる2人。

「・・・ごめん、まだ出てる。」

その言葉を聞いたときには、安堵するより先にただズッコケるしかなかった。

ギャグマンガにはよくあるようなズッコケ方だ。

そして、

「あ・・・ははは！」

「お前、ほんとにまだ出してたのかよ!! あっはっは!!」

「な・・・なんだよう!・・・あはは!」

この事件が起こって、3人とも初めて、心から笑ったのだ。

この先のことは分からない、だが、心に希望の光が灯った最初の瞬間だった。

『覚悟と希望』俺が抱く些細な希望の殆どは、大抵駄目になる。まあ大体俺の自

はい今回もこれですね。今回は安雄とはる夫。

——やあ、くそみそ組

「何だよその呼び方。」

——いやあ、なんつーかさ、

原作のびハザで二人とも共通点があつてね。

だから俺とりあえずあんたらをくつつけとけばいいだろうって
考えてて。じゃあいつそ相思相愛にでもしちゃうかと。

「やめろ。今回を機にスッパリやめろ。」

「で、俺達の共通点ってなんなんだい？」

——その1・初登場の場所と死ぬ場所が同じ。

安雄のは学校内だから部屋が違っても同じとカウント。

その2・俺が誰だか知らん。

この章の最初の話でも書いたが本当に誰だよお前ら。

「こ、この野郎……。」

「先生の名前について調べてる暇があつたら

俺達についても調べてくれればいいじゃないかあ。」

——じゃーねえな、じゃあちよつと調べてくるよ。

（筆者検索中） ガチ

——ただいまー

「いやはええよ、3分ぐらいじゃねえか。」

——まあ、ちゃんと調べてきたからさ。

「よし、じゃあ読者の皆さんにも知ってもらおうかなあ。」

調べてきたことを発表してくれよお。」

――まず安雄。

お前・・・だいぶ人気だったんだな・・・。

「へへっ。」

――次にはる夫。

Wikiによると「ドラ焼き・映画・予約ずみ」に名前が出てたらしいが、俺その話読んだはずなのに全く覚えがねえぞ。こういうことは滅多に忘れねーのに。

「そうなのかぁ・・・。」

――まあ、結論。やっぱりお前ら、結婚しろ。

「なんでそうなるんだよこの野郎。」

――だって共通点結構あるよー？

その1・どちらも怖い物がある。

――（安雄はお化け、はる夫はクモ）

その2・ジャイアンスのメンバー。

しかもどちらものび太を馬鹿にしている描写がある。

その3・声優が4人ぐらいダブってる。

なんか名前出したらまずい気がするから出しません。

興味がある方はご自分で調べてください。

つつーかなんだかんだいって声優女だらけだな。

「そりやお前の好きなドラゴンボールにだって言えるぞ。

悟空だって女性が声優やってるじゃねえか。」

――そーいやそーだなあ。

つつーかお前ら実際仲いいだろ。

安雄の趣味にはる夫とキャッチボールってあったぞ。

「まあ、な。」

「まあ、ねえ。」

――そーいう友達もいいものかもねえ。

俺がキャッチボールやったら

顔面にボール当てて鼻血出すだけだが。

「運動は苦手なのか。」

——ああ。腕力は平均よりは上のつもりだが、
今じゃすっかり太っちまってね。

粘りは他の奴よりあるが持久力っつーより気合だな。

「ふうん。」

——さて、なんかg d g d話しこんじゃったな、

そろそろ終わるか。最後にお二人さん、何か言うことは？

「俺達人気キャラなんだからな！多分！応援頼むぜ！！」

「これ、俺が鼻くそで作ったボールなんだあ。どうだい？」

——すぐく・・・大きいです・・・。

まあ、これまでじゃ一番まともな相手だったかな？

そうだ、二人とも、キャッチボールの代わりにこれ。

「ん？豆じゃないか？」

「食っていいのかあい？」

——食うのは後でな。今日は節分だろ？

豆まきでもやってきたらどうだい？2人仲良く、な。

「面白そうだな、行こうぜ、はる夫！」

「おおっ！」

——ま、やはり小学生、か。

それでは皆さん、ご機嫌よ・・・あたっ。

てめえら、こっちに投げんな！いてっ！！

『成長』俺は成長しないなあ。STGとタイピングの腕は成長したが、そんなシャッターの音ってほんとうるさいです。俺学校じゃ弓道部やってるんですが、矢を撃つほうにシャッターがあつて、

練習のときにそれを開け閉めしてるんです。とにかくうるさい。凄まじい轟音。

ジャイアンの歌声すら無効化できるんじゃないか？

『成長』俺は成長しないなあ。STGとタイピングの腕は成長したが、そんな

この事件が起こって初めて大笑いし、
幾分かすつきりしたのび太とジャイアン、そして太郎は保健室へ帰
ってきた。

「ただいま、待たせてごめんね。」

「のび太君、君たちの笑い声、こつちまで聞こえてきたよ？何が
あつたんだい？」

ドラえもんが尋ねる。

「あはは、それがね、太郎ったらさ・・・」

「い、いわなくていいよう！そんなこと！！」

「もうのび太は大丈夫だ。今までみたいに足を引つ張る事は無いだ
ろう。」

「そうか、ママやパパのことを乗り越えられたんだね。」

「うん。正直言っただのことはまだ怖いよ、だからこそ、もう誰も
死なせない。」

決意に満ちたのび太の目を見て、ドラえもんも頷く。

「3人がいない間に、探索のメンバーを考えたんだ。」

と、出木杉が話を切り出す。

「先生と金田さんはこの保健室に残っていてください。」

「ああ、すまん。」

「ふん、当然だ。私は外に出る気はないのだからな。」

他の全員が金田には嫌悪感を示していた。

「次。たけし君、健治君、太郎君はコンビニの探索だ。」

「使えそうなものがあつたらここに運んできておいてほしい。」

「うん！」

「了解だ。」

「おう。動ける奴らじゃ俺が最年長か、しっかりしないとな……。」

「

「そして僕としずかちゃん、ドラえもん君、はる夫君は、

外の探索も兼ねて僕達の家をまわろう。家族の生死も気になるし、何かあるかもしれない。たけし君の家には食料品がありそうだし、

スネ夫君の家にも珍しい、役立つものがあるかもしれないし。」

「分かったわ。」

「いいぜ。」

「了解だよ。」

「残りの4人、のび太君、聖奈さん、スネ夫君、安雄君は学校の探索をしてほしい。

まずはこのへんの防火シャッターを開けないことには……。どうだいスネ夫君？」

先ほどから保健室のパソコンをいじっていたスネ夫に声をかける。

「うーん……。多分USBが何かに

シャッターを開けるプログラムがはいっているんだと思う。

入力画面には来れたんだけど、それがないことには……。」

「それって……。もしかしてこれかな？」

太郎がUSBメモリを差し出した時には皆が驚いた。

それを受け取ったスネ夫がパソコンに差し込む。

「こ、これだ！これで開けられるよ！少し待ってて！！」

「すごいぞ太郎！いったい、どこで見つけたんだい？」

のび太が尋ねた。

「さっきトイレで、タンクのうらに何かあるのを見つけたんだ。そこをしらべたらこれが……。」

「なんでそんなところにあっただんだ？」

ジャイアンが不思議がっていた。誰にもその答えは分からないが、とにかく一歩前進だ。

数分後、パソコンが音を鳴らし、轟音が響いた。

「開いた、開いた！これで校内を探索できるよ。」

「ありがとう、スネ夫君。それでは皆、探索を始めよう！」

出木杉が言い、先生と金田以外は保健室を後にした。

保身に必死な金田以外は皆、良い方向に向かってきていることを感じた。

皆が生き残ろうと必死で、それでいて雰囲気もどことなく明るくなっているようだった。

その原動力となっているのは間違いなく、決意を胸にしたのび太だった。

「立派になったね、のび太君……。」

歩きつつも、少し涙ぐみながら、ドラえもんが呟いた。

『成長』俺は成長しないなあ。STGとタイピングの腕は成長したが、そんな

はい、今回も座談会。えーっと、今回のお相手は・・・
出木杉・しずかの秀才コンビ。

——やあ。

「どうも。」

「こんばんは。」

——うーん、やっぱり男キャラと女キャラだと

どっちが喋ったか分かりやすくていいねえ。

俺はそのへんの技術がかなり未熟だから。

他のことも全然駄目だけどね。

「それはそうと、何を話すんです？」

——そうだなあ、何かここまでの流れや

俺のことに關すること無いかい？

「うーん・・・。そうだな。」

「じゃあ私から。」

——はい、何でしょう？

「筆者さんは何歳なのでしょうか？」

——この前の話のタイトルから大まか想像はつくだろうけど、

エターナルフォースブリザードとか

邪気眼だとかほざいてるような年齢です。中2です。

「なるほど。じゃあ僕からも。なぜこれを書き始めたんです？」

——何故・・・って、ねえ。書きたかったからだ。

大した意味は無い。

「無いんですか・・・。それはそうと、これ、

最初はギャグ路線のつもりだったんですよね？」

「うん。そうなんだ・・・けどね。」

事態を深刻化させ過ぎちゃったよ、ママのところで
でものび太もシヨックから立ち直れたようだし、
そろそろふざけさせようかな？

「今回のラストのドラえもん君の涙が無駄になりますね。」

「大丈夫だ、問題ない。」

「問題ある気がするけどなあ・・・。」

「ところで出木杉君ってさあ。」

「はい。」

「よくよく考えりゃ、安雄やはる夫と同類だよな。」

「・・・は？」

「なんか個人的に若干印象強いけどさ。」

メインメンバーとは言えないよね。

劇場版なんかでもないし。」

「・・・そういえば。」

「原作のびバザでだって、バカンスから帰ってきた時、

出来杉君いなかったよ？」

「うっ・・・。」

「そして拳句の果てにすごい悪い役回り。」

駄目だわお前。」

「それ以上言うとまずいんじゃない？」

「ははは、この小説は色々話の筋が変わってくるからさ、

原作のネタバレはある程度したって大丈夫さ。」

「大丈夫じゃない気がする・・・。」

「そっだ、筆者さん、また質問なのだけど。」

「なんだい？」

「筆者さんのびバザクリア履歴は？」

「ああ、そっいやこれ言っただけだったねえ。うん。」

リマスター版とVX版だけやってます。
一応両方クリアで、リマスターは2週、VXは1週。
どちらも1週目はランクDで、
リマスター2週目は救急ボックス未使用ノーセーブ、
クリアタイムは40分でした。
1週目のクリア時なんて、回復アイテム残って無くて
HP6だったのにね。
最後のロケランが偶然当たってくれて良かったよ。
「なんか1週目と2週目で変貌しちゃってるわね。」
——っん。

——・・・さて、なんかグダるなあこの企画。
そろそろ終わりましたよ。

最後にお2人さん、何か言うことは？

「私は特にないわ。」

「僕も。まあ、何か言えというなら・・・。これを見てください。」
——ん？なんぞこれ？

「僕の1年生からのテストを纏めた物です、100点ばかり！
天才の僕にかければこんなもので・・・」

——はいはいすごいすごい。では今回はここまで。

「ちょwおまww」

——出木杉君、小学校の勉強ぐらいで
調子に乗らないほうがいいぜ。

『コンビニ超便利』俺あんまりコンビニ行かないけど、色々ありますよね。じゃあ

昨日は体がだるかったので書くのサボりました。ごめんなさい。
そしてコンビニのおにぎりって本当にうまい。

『コンビニ超便利』俺あんまりコンビニ行かないけど、色々ありますよね。」

「・・・ああー!!」

先生が大声を上げる。

「うるさいぞ!どうしたんだ?」

金田が怒鳴る。

「さっき発見した通信機を野比達にやるのを忘れていた・・・。

やはりこの歳だと物忘れが・・・なあ・・・。」

「・・・物忘れか・・・。私も最近記憶力が危なっかしくてな・・・。」

保健室待機の中年組はのんきな物であった。

ついでに、その声を聞いた学校探索組が保健室に戻ってきた。

保健室の扉の前で、2人1組に別れて北舎と南舎で探索をしようと相談していたのだ。

「どうしたんですか、先生。」

のび太が聞く。

「おお、まだいたのか。丁度よかった!」

先生は事情を説明した。

通信機は全部で5個あった。

「ううむ、1個はここに置いておくとして・・・あと4個か。

各グループに1個ずつ配ったとすると1個余るな。」

「じゃあ僕達には2個ください。2グループに別れて探索をするので。」

「分かった、頑張つて来い!他のグループにはここに帰ってきた時に渡しておこう。」

学校探索グループはのび太と安雄、スネ夫と聖奈に別れて、

のび太と聖奈が通信機を持って探索を開始した。

一方でこちらは外。家回り組とコンビ二組。道路にはゾンビが結構いた。

「たけし君、まずはこいつらを大方片付けておこう。」

「分かった。」

出木杉とジャイアンを筆頭に、太郎以外は全員が臨戦態勢をとった。出木杉やジャイアンの戦闘能力には健治も驚いていた。

「やるなあ、お前ら・・・。」

しかしその健治が一番戦果を挙げているようだった。持ちやすく鋭利なナイフを持っているし、喧嘩慣れもしているようだ。

辺り一帯のゾンビはすぐに全滅した。

「ふう、終わったな。」

健治が額の汗を拭う。

「そうだとけし君、僕達は向こう側から皆の家をまわってみるから、君達はコンビ二に行くついでにのび太君達の家も見えてくれ。」

「分かった。」

「じゃあ皆、頑張ろう。」

そして2グループに別れての探索が始まった。

まずはジャイアン達コンビ二組。

「何かあるといいんだがな・・・。」

そう言いつつ先頭を歩くジャイアンに従う2人、そこで健治が

「つつーか俺が一番年上なんだし、俺が先頭行ったほうがいいんじゃないねえのか？」

と言い出し、健治が先頭で、太郎を挟むようにジャイアンが最後尾

になった。

そしてコンビニに辿り着いた。

無論、店内にもゾンビはいたので、太郎を隅に待機させておいて殲滅した。

ジャイアンは店内の棚を、健治と太郎はレジ及び倉庫を探索することにした。

「やっぱり食料品が最優先だな。」

コンビニには豊富な食料があった。しかしいつまでこの状況が続くか分からない、

無駄遣いはできないだろう。他にも治療に使える道具、ライター等の日用品も仕入れ、それらを買う物籠に入れると、15個分にもなった。

いくらジャイアンでもこれは持ち切れない。

「駐車場から適当な車を借りたほうがいいな。」

こちらは健治&太郎。

健治はまず煙草を10カートンほど買い物籠に入れた。

「これがねえとどうにもな……。」

そして倉庫へ。

ここにはナイフ等の武器や、大量の段ボールがガムテープがあった。ある物は何でももらっておいたがいいだろう。

「……ん？この段ボールやったら重いな。一体何が……!!」

その段ボールの中身を見た健治は絶句した。

そこには大量の銃があったのだ。いわゆるハンドガンというやつだろつ。

別の段ボールも調べてみたら、弾薬が入ってる物もあった。

弾薬は2種類見つけたが、銃はハンドガンだけだった。

何故こんな物があつたのかは分からないが、

とにかくこういった武器があると非常に助かる。有難くもらっておう。

そしてそれらの荷物を持ってレジの前でジャイアンと健治&太郎は合流した。

「随分あるな。持ち運ぶのは無理だろう。」

「ああ、だから車を借りちまおうぜ。緊急事態だ、しょうがねえだろ。」

「分かった。」

ジャイアンの提案どおり、適当な車を借りることにした。

幸い、品物を運んできたらしいトラックがあり、積荷ごともらっておくことにした。

健治は乗り逃げ常習犯だったらしく、運転も慣れていた。

のび太の家にも寄ったが、目新しい物は見つからなかった。

「なあ、トラックってもう1台あったよな？」

健治が思い出しながらいい、ジャイアンも「ああ」と相槌を打つ。

「んじゃ、保健室に収獲物を運び込んだら、

このトラックは鍵かけて校庭に置いておこう。

そんでもう1台のトラックに乗って出木杉達を手伝いに行くぞ。」

意外と協調性のある健治にジャイアンと太郎は若干驚いていた。

学校に戻ってきた3人が保健室に荷物を運び終えたところで、

ジャイアンが先生から通信機をもらった。

そしてのび太に発信した。

「のび太か？」

「ああ、ジャイアン？通信機をもらったんだね。」

「ああ、俺たちはこれから出木杉たちを手伝いに行ってくる。

今午後3時だから・・・午後5時には保健室に集合だ。探索の成果

を話し合いたい。」

「分かった。聖奈さんには僕から連絡しておくよ。気をつけてね。」

「ああ、そっちもな。」

そして通信を終えた。

「・・・んじゃ、行くか、健治、太郎。」

と後ろを振り向くと太郎は既に眠っていた。

「・・・しょうがねえな。健治、俺達だけで行こうぜ。」

「ああ。」

そして2人はコンビニでもう1台のトラックに乗り込み、出木杉達を探しに出発した。

『コンビニ超便利』俺あんまりコンビニ行かないけど、色々ありますよね。」「

座談会コーナー。えーっと、今回のお相手は健治と太郎。
それとなんか余っちゃったドラえもん和金田。

——よお。

「おう。」

「こんにちは。」

「余ったんだ僕……。」

「私が金田だ。」

——んー、何か話すことなんてあつたっけなあ……？
とりあえず、ここまでの流れとかに関して何か？

「あるぜ。」

——ほう？なんだい健治。

「なんで俺あんなワルになつてんだよ。ヤニとか乗り逃げとか。」

——んー、そっちのほう面白いかと思つてね。

今更変えられないよ？

「こんのやる……。」

「スネ夫と先生のととき他のキャラの組み合わせは決めたつて言つてた癖してなんで僕達余つてんの？」

——ごめん、お前らのこと忘れてたんだわ。

「この町内会長の金田を忘れるとは……。」

——覚えておいてほしけりや保健室の外にでも出てみるこつたな。

「うう……む。」

「じゃあ僕は何で忘れられたの？」

——ごめん、完全になんとかなく。

「……ポケットさえ壊れてなければ……。」

「それはそうとお前よお。」

——ん？

「お前が原作のびハザやったとき、俺の名前何て読みやがったよ。」
——はがけんじ。インセクター羽蛾。

「・・・だよなあ。ナメてんのか？」

——お前の漢字が難しいんだよ。翁とか。翁とかww

「こいつ・・・殺す。」

——お前作中で死にたいか？

「ん？死なない予定なのか？原作のびハザじゃ死んだろっ。」
——迷ってる。どうなるかなあ？ふふっ。

基本キ―を打ちながら話を考えていくんで、
その時の気分で決まるかもな。

だがそちらの態度次第じゃ・・・ねえ。

「・・・ケツ。リアルでもこんな嫌味な奴なのか？」

——そうでもない、って自分で言っちゃあれだが。

脅迫なんざする性質ではないかな。

しっかし、4人もいると逆に扱えきれず話が進まんな。
もう終わらせちまおうか？

——っつーか次回から後書きどうすればいいんねん。

・・・あれ、太郎、また寝てやがらあ。

「本編中から寝てたからな。まだ眠かつたんだろ。」

「そっだ、ここにあつたドラ焼き知らない？」

——ん？俺は知らんが。

「ああ、食ったぞ。私が食いたかつたんだからあれは私の物だ。」

——当然のように最悪なことを言うなあ前。

——本当に殺してやろうか・・・。

「その前に僕が今ここで殺す。」

——やめとけ、本編で俺が困る。

最後に皆さん、何か言うことは？

「ドラ焼き返せー!!」

「私は町内会長だ！偉いんだ！！」

$$\begin{array}{c} \top \\ Z \\ Z \\ Z \\ \bullet \\ \bullet \\ \bullet \\ \circ \\ \bot \end{array}$$

……駄目じゃこりや。

次回からの後書きコーナーがどうなるかはわかりません。次回のことは次回考えればいいんさ。

それではばっはーい。

『盗んだトラックで走り出す』この話を書くためにこのサブタイトルの1フレー

——さつてと・・・ん？どうしたスネ夫前書きになんか来て。

「いや、やたらと長い間更新がなかったからどうしたのかなと。」

——あー？なんとなくだよ。うん。

テスト期間中ではやく帰れたついでに書いてところかなと。

「なんとなくって・・・。話はちゃんと考えておいたんだろうな？」

——うんにゃ。キーを打ちながら話は考えるぜ。

「おいおい・・・。」

『盗んだトラックで走り出す』この話を書くためにこのサブタイトルの1フレー

「盗んだバイクで走り出す」

盗んだトラックで走りながら歌うジャイアン。

「な・・・なんつー歌声だ・・・。」

健治は初めて聞くジャイアンの歌声に頭を痛めていた。

「闇の中　ぽつんと光る自動販売機」

薄暗くなっていた道を右折すると、自販機ではなくドラえもんがいた。はねた。

「・・・やつべえ・・・。」

ジャイアンも健治も顔が青くなった。

そして元から顔が青い被害者は2、3回バウンドして塀にぶつかった。

「・・・あいたた・・・。」

こう呻いてるのはドラえもんではなくジャイアンである。

流石にあの程度では死なないドラえもんであり、

車を降りていたジャイアンが真つ先に謝罪してきたので、

ボディーブロー一発で許してやった。

もしちゃんと謝ってこなかったらリクームがベジータにしたように
蹴るつもりだった。

「おい青ダヌキ、お前はなんで1人なんだ？ガキ共はどうした。」

こう聞いてきた健治の胸倉を掴みながらドラえもんは説明した。

「全員で一緒に探索すると全部まわるのに時間がかかりすぎるから、
2手に分かれたんだ。僕ははる夫君と組んだんだけど、彼は今トイレにいるよ。」

「そうか・・・ところで放してくれ。もう青ダヌキとか呼ばないから。」

トイレから出てきたはる夫も乗せ、ついでにドラえもんにも通信機を渡しておいた。

「あとまわる家はあるか？」

「ううん、ちょうどまわり終わったところだったんだ。」

そういうことなので出木杉たちを探すことにした。

ルートは大体想像がついたのでその辺を探していると、病院に入ろうとする出木杉達がいいた。

「出木杉！」

「たけし君！それに健治さん達も！」

「なんで病院に入ろうとしてたんだい？」

ドラえもんが聞いた。

「ここなら何か役に立つものがあると思ってね。」

という出木杉の言葉はもっともだったので、6人全員で探索することにした。

一応ジャイアンは学校に連絡しておくことにした。

「先生、今出木杉達と合流したんですけど、病院を探索してから学校に戻ります。」

「ああ、分かった。気をつけてな。太郎君はよく寝ておるよ。」

「はい。」

そうして病院にはいった一行だが、電気がつかなかったのでもう帰ることにした。

「先生、電気がつかなかったんで明日また来ることにして今日はもう戻ります。」

「ああ・・・そうか。気をつけなさいよ。」
「了解。」

そして6人はトラックに乗り込んで学校へと走り出した。

『盗んだトラックで走り出す』この話を書くためにこのサブタイトルの1フレー

サー、後書きの世界ですが、

現在は工事中となっておりまのでしばらくお待ちください。

何の工事かって？新しいコーナーのね。

何するか考えてないままっていうのは内緒です。

妄想中の企画はあるがまあ結構先のことになるでしょう。

『疑惑』金庫といえば昔家にあるダイヤル式の金庫見たけど、あれのナンバーと

すんごい久しぶりの更新。

なんとなくサボってました、ごめんなさい。

でも果たして読んでる人がいたのかなって疑問に思わなくも無いです。

ところでなんとなく前の話見てたら第7部のあとがきで、

最後の健治のセリフ思いつきりミスってる件。

ハガじゃなくてオウガだったの。直しておきます。

『疑惑』金庫といえば昔家にあるダイヤル式の金庫見たけど、あれのナンバーと

一方、こちらは学校探索組の、のび太と安雄のグループ。

時系列的に言えば、学校で通信機を貰ったジャイアンとのび太が通話した直後だった。

「・・・あっちも頑張ってるみたいだな、こっちも負けてられないよ。」

「ああ、そうだな。」

この時点でこのグループはほとんど何の成果も挙げられてはいなかった。

ちなみに今日は1階を徹底的に探索しようということになって、のび太と安雄のチームは南舎、聖奈とスネ夫のチームは北舎の担当になっている。

先に開いている教室と開いていない教室を一通りチェックした後で探索を始めた直後で、

今2人が見つけたものは、真っ先に女子トイレに入った安雄が見つけた緑色のハープと、

会議室でのび太が転んで頭を打った棚の上から落ちてきた紙切れぐらいだった。

その紙切れには『6358』という4桁の番号が書かれていたが、何の番号かとんと見当がつかなかった。

職員室でも緑と赤のハープを1つずつ回収し、その隣の校長室にはあった。

校長室には金庫があり、4ケタの数字を入力するタイプだった。

「4桁・・・まさか！」

のび太が金庫に入れた数字は紙切れに書いてあった『6358』という数字だった。

見事ドンピシャ、金庫は開き、その中身を見た2人は驚愕した。

「・・・銃!？」

「お、おい、なんでこんなものが・・・。」

のび太は銃には知識があつた。その銃はいわゆるショットガンという物で、

ハンドガンより威力があり、広範囲への攻撃ができるうえ貫通力に優れた散弾銃だつた。

「・・・なんであるのかは分からないけど、もらつておこう。」

安雄、ハンドガンぐらゐは扱えるだろう?一応持つておいてくれ。」

のび太はショットガンを取ると、先に持つていたハンドガンを安雄に手渡した。

「あ・・・ああ。」

金庫の右のほうを見やると、像が2つ並んでいた。

よく見るとその像の下の床とその間の部分だけは水色になっていて、真ん中には

ちようどこの像1つ分の幅の空間があつた。

「・・・そういえばここにも像があるな。安雄、ちよつと手伝つてくれ。」

安雄にも手伝つてもらい、机のすぐそばにあつた別の像を真ん中のスペースに移した。

すると大きな音がした。その音のした方を見やると、ドアができていた。

「すつげえ仕掛けだなあ・・・。」

そのドアの中には趣味の悪い像や、トイレの看板があつた。

そしてロッカーもあつた。そのロッカーを開けると掃除用具があつた。

しかし、そのロッカーの中のフックには鍵がかかつていて、その鍵についていたステッカーには、『更衣室』と書かれていた。

「……………!?」

よく見るとロッカーの上には明らかに隠し撮りと思われるアングルの
テニス部の写真まで飾ってあった。

「……………校長先生……………」

「俺達……………なんでこんな学校に入っちゃったんだろうな……………」
ある意味このゾンビだらけの事態より重大なのかもしれない。

しかしそればかり言ってもいられないので、更衣室の鍵は取ってお
き、

職員室を出て、南舎の中では北の方の（ややこしいな）別の教室に
入った。

その教室の教卓の上には、『資料室』と書かれたステッカーの貼っ
てある紙があった。

「おお、ラッキー……………」ガシヤアーン!!

鍵を取った瞬間、突然に窓を突き破って犬が襲い掛かってきた。

「うおっ!!」

焦って無意識に狙いを定めて安雄が撃ったハンドガンの弾は、見事
犬に直撃した。

「ナイスだ、安雄。」

そして取った鍵を使って資料室に入り、二人は手分けして探索を始
めた。

「……………まだオイルが残っているライターがあるな、貰っておこう。」

「

ゴミ箱を覗いてみたのび太はそれを見つけて、

火を使えるのは今後重宝するかもしれないと貰っておくことにした。

「安雄、そっちは何かあったかい？」

「うーん、変わったものといえばこれぐらいだな……………」

安雄が差し出してきたのは1つの文書だった。

それは学校の警備員への行動を指示したものだだった。

その文書でのび太が気になったところが一箇所あった。

「なあ安雄。・・・E-11ってなんだろう？」

「さあ、一部のエリアの名前なんだろうが・・・。」

普段ならあまり気にすることもないだろうが、ただでさえこの学校には謎が多い。

そんな学校の、警備員すら立ち入り禁止の区域となれば気になるのも無理は無かった。

「・・・まあいいや。一応この文書も持って、一旦そろそろ保健室に戻ろう。」

「分かった。」

（・・・しかし、銃といい謎のエリアといい、この学校は・・・？

（校長の性癖は悲惨だったな・・・。）

色んな意味での疑惑と驚きを胸に、二人は保健室に戻っていった。

『疑惑』金庫といえば昔家にあるダイヤル式の金庫見たけど、あれのナンバーと

——さて今回もまだ工事中ですね、はい。

それではさような・・・ん？どうしたよ、スネ夫。
つつかドアぶっ壊すなよな。

「お前、どれだけ更新サボってたんだよ！」

——ああ、なんとなく・・・ね。なんでだろう。

「なんでだろうってお前・・・まあ、あれだ。

せめて、今後の展開とか考えてあるんだろうな？」

——いや、まったく。

「おおい！！！」

——まあまあ。それよりもドア復活しかけてるよ？閉まるよ？

今度はさつきよりずっと強固になってるから

もう破れないだろうし、帰れなくなるだろうね。

「ああもう、今度からちゃんとやれよ！？じゃあな！！！」

——・・・何しに来たんだか。それではさようなら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5654q/>

のび太がバイオハザード

2011年6月21日01時29分発行